

tab

No.
42

2
0
1
4
/
07
/
15

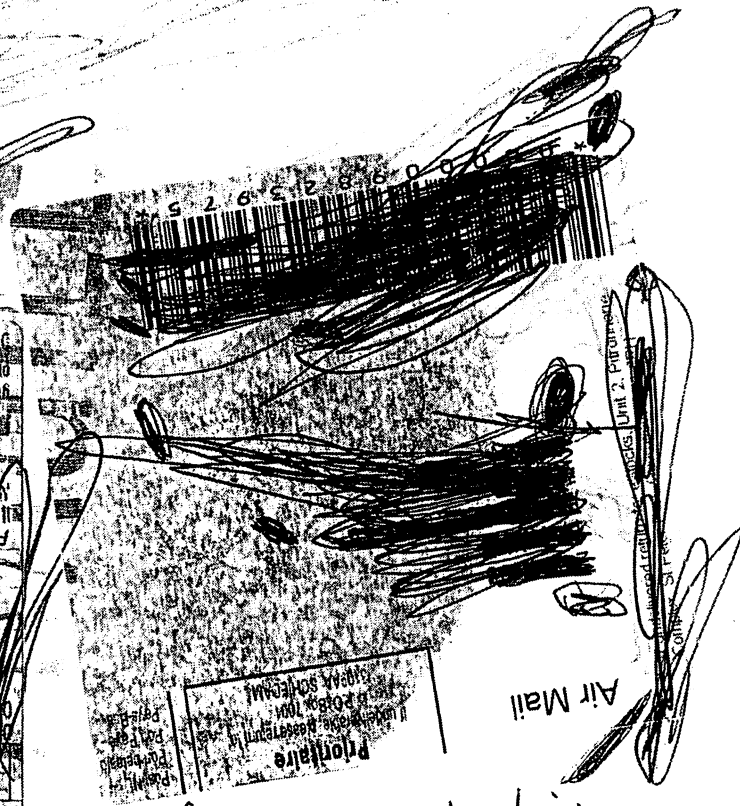
後藤美和子 / 野村龍 / 長尾高弘
福島敦子 / 秋川久紫 / 浅野言朗
小林垣堀 / 中村剛彦 / 木村和史
水島英己 / 倉田良成

楯 = *Machilus thunbergii*

CUSTOMS DECLARATION
 Make an honest declaration
 Penalties apply for false
 information! See instructions on the back

Commercial sample/description - commercial		Other duties	Markings or marks thereon
Weight (1) kg (2) Value (3)	Weight (1) kg (2) Value (3)	Points	Value (3)
0 110	0 110	14 903EP	14 903EP

For commercial items only
 U.S. Harmonized System number (1) and country of origin of goods
 Markings or marks thereon
 The indicia whose name and number are printed on the package
 given in this declaration are complete and correct and do not contain any dangerous articles
 or articles prohibited by law.
 Date this declaration made
 Fred Smith
 10/05/2014



als was ich bin
 s.r.

2014.5.29

[Handwritten signature]

cont.

詩篇

後藤美和子：ウラジミル／02

野村 龍：公案／03

中村剛彦：時を織る手／05

福島敦子：薔薇園／07

長尾高弘：アクシデント／10

浅野言朗：未然の鳥／13

水島英己：すべての通りで／15

小林埜嶋：砕けた、／17

秋川久紫：さらばシベリア鉄道♪・ほか／19

倉田良成：子どもの情景6篇／24

文

木村和史：外れる／30

秋川久紫：テネレの夜の煌めき―武邑くしひ句集評―／34

あとがき集／38

画：和田彰

後藤美和子

ウラジーミル

ライオンのように吠えながら

諸手を挙げて死んだ人

その恋人の

緑の湖水と白い岸

まだ時間はあつた

追いかけて

腕を擱めばよかつた

街中を跳ねまわる虫たちに合わせ

踊りながら越境すればよかつた

そうすれば、きつと、もはや

誰も彼を知らず

誰も彼の言葉を解さず

揺りかごの中で

天井を見つめ

それでも、やはり、もう

すでに死んでいたことだろう

(皆既食六九)

野村龍

公案

魚の花の季節

音の標本

歩いて行く煙

しつとりと滅びる声

時間が開く

耳が枯れる

瞳をそっと含むと

光が脈打つ

蝶を解体する

涙が僅かに膨らむ

蜂蜜がねむりから醒め

濡れた翼は輝く

軟らかな電話を

花びらで切り分ける

皆に見守られて

書斎が

歌の奥へ沈んでいく

中村剛彦

時を織る手

体の中を流れている

時の糸を紡ごうとして

ことばが生まれ

くるしみが生まれる

時は戻らないから

出生を裏切った紫の罪の糸が

ふるえる指先で

鈍色の贖罪の糸と絡まり

生きる欲望の水に落ちる

そして

祈りの波紋は冷たく広がり

畏れと悲鳴の糸が

体の隅々に二重螺旋を織り込んでいく

やさしく、綿密に、一寸の乱れなく

死ぬるときまで

死ぬるときまで

やがて水底から

「アコガレ」という文様と

「エミグレ」という韻律が

舌尖に浮き上がり

時は

はじめて

ひとりの亡命者の手で

白布に綴られる

詩が世界を巡りはじめる

福島敦子

薔薇園

白い着物を着た父に

薔薇の花びらをまいた

黒赤と薄紫がはらはらと舞う

父は黙っていたけれど

きつと喜んでいただろう

お棺の中は

薔薇の花びらであふれた

甘い香りがする

たてながのダンボール箱に入った京成バラ園の苗
が届く

パパメイアン

オクラホマ

ミスターリンカーン

ピース

ブルームーン

レディエックス：

いつの間にか庭は薔薇でいっぱい

小学生のわたしがその中に立っている

40年の間 父の育てる薔薇園からは

いつも甘い香りが漂っていた

病室のベッドに横たわる父

の最期の背中

薔薇の葉の黒点病のような斑点が出来ていた

お父ちゃん 薔薇みたい：

動けなくなった肉体から解放されて

父はまた 薔薇園をつくっていることだろう

ロイヤルハイネス

クリスチャンディオール

ソニア

クイーンエリザベス

ブラックティ

パスカリ

そしてやっぱり パパメイアン

父は微笑みながら

薔薇の花びらの中に身体を埋めている

ああ…

やっとたどり着いたんだ

長かった と思う

長尾高弘

アクシデント

いつもの帰り道を

いつものように歩いていた、

ただそれだけだったんだけど、

いつもと違って何やら足がもつれたんだ。

転ばないで何とかなると思っていたし、

今までだったら何とかなっていたはずだけど、

気がついたら肩から落ちていたのさ。

何たる不覚。

何たるへま。

そして今までにない痛み。

痛いのは肩なんだけど、

立ち上がれなくてさ。

歩道に座り込んでしまったよ。

こりやだめだと思つて、

奥さんに電話して、

車で迎えに来てもらった。

それから病院。

とつくに夜だったから、

救急しか開いていない。

おまけに何やら食中毒かなんか

あつたらしくて、

やたらと繁盛してる。

おまわりさんまでいてさ。

転んで肩が痛いなんて間抜けなやつ、

なんでうちに来ちやつたんだって感じ。

普通なら

レントゲンはすぐにお声がかかるはずなんだけど、

そのレントゲンがめちやくちや混んでて、

病院行つてから三時間待ち。

肩の人はゆつくり待たせていいよと、

若いお医者さんに言われちやつたよ。

でやつと撮つてもらつたら、

鎖骨が見事にぼつきんこ。

肋骨も一本逝っていた。

ああ、病院に行つても、

文句のない状態だったんだなど、

ちよつとほつとしたよ。

でも、鎖骨が折れたくらいじゃ
入院しないらしいよ。

何やら鎖骨のところをとめる

バンドみたいなのをしてもらって

(買ったんですよ、もちろん)、

明日整形外科に改めて来てねと言われて、
今帰ってきたとこ。

参ったな。

浅野言朗

未然の鳥

白い空白の池に

降り立った鳥は

二枚の羽をはずして

水面に折り畳む

畳まれた羽を狙うかのように

白い池を囲む獣たち と

羽を外して

鳥であることをやめた 影

降りられない黒い鳥たちは

空に円を描き続けている

獣たちは 黒い鳥を真似て

丸い池のまわりを旋回する

安全な領分にも

危険な領分にも
みなされる 円
架け渡された 直線

池を横切る 直線の上に
出自の違う鳥が 降り立つ
鳥たちは 羽を一枚はずして
水面に折り畳む

最初に 鳥であることを
放棄した 影 は
不完全な模倣者の群れ を
微笑んで 祝福する

そろそろ 獣たちは
円を巻き取って 梱包を始める
残された 不完全な影／鳥の群れ
の 出荷の時刻が 迫っている

水島英己

すべての通りで

すべての通り。これまでの、これからの。ペットボトルや空缶が散乱している。ビルの窓ガラスは夕日を反射している。すべての貧しい通り。投身することもなく川に沿う通りをきみは歩いている。その傲慢さ、恥ずかしさの通り。百年後の通りを想像して、道の石を蹴飛ばす。きみの無つぼ作りはつぼ作りをねたむ、乞食は乞食を、と古代の詩人は歌った。何に焦がれようとして今朝の空は晴れているのか。鳥たちの鳴き声が一瞬止む。裂けていくもの、紙、その上の逡巡、記憶のなかの欠片、こころのなかの肉。夢で、幾度も寝返りをうちながら、愚昧の愚の字を探していた。

姓名を書けたら字はどうでもいいと言ったのは項羽。「人生字を識るは憂患の始め」は蘇東坡。これは書が楽しみだということの伏線だ。言葉なんかおぼえるんじゃないやなかった、と隆一は書く。これは帰途のための伏線。字も言葉もなかったら、すべての憂患の陥穽もなかったらう。大丈夫か？

月のことを忘れていた。暗くなっていく下弦の記憶。どこから来たのかと問われたのだった。東京と答えると、テキサスよりも遠いのかと青い眼が光る。Tシャツには錬金術師がフラスコを掲

げている奇妙な絵がプリントされていた。東欧の汚れた小路。自ら溶解するものの思い出。

きみは生きている。光の届かない、人のいない森の中。丈高いキノコがきみの地下王国の門柱だ。掘削に厭きて、きみは己の長く伸びた爪で貯蔵していたミミズを割いて食べる。子供たちは成人して、遠い異邦の王国に行つてしまった。食べ終わるときみは鱒二やカフカを小さな暗い目で読む。

「裏切られもしないで、裏切りもしないで……」この身ぶりはなんだろう？ 寂しいアイロニーの果てに、きみの航路は夜のトンネルにのみ込まれていく。決意の指を鉈で切断することもしない。「危機にすらメルヘンを強ひられた心」がそんなに弱いとは。きみの歌は盗まれもしないで、盗みもしないで。

五月、櫻の落花を踏みしめながら。透き通る緑葉の窓。遠く稜線に金色の陽が沈むのが見える。光源のような後悔がおまえを照らす。隠すこと、光の中に、と。木々に触れつつ歩く。それを踊りと言え。美しい五月に。靴を隔てて肌を搔く。幾度も聞こえてくる。涙はあふれ出て。

小林柑塙

砕けた、

酩酊の果ての朝焼けに向かつて石を蹴る。橋の欄干にもたれてかたまっていている人間がちらほらと見える。夜警を終えた自転車車の軋る音、遠く、近づいてまた、遠く。コカコーラの空瓶を太陽に透かす。烈しく暗くそこに燃えるものがあつた筈だと、知つてい乍ら信じていない態で、叩き割る。幾度も幾度も。目覚めよ！ 蒼ざめたる馬が……笑いはいつも皮肉に痙攣する。橋の人びとは気づけばおらず、また陽は高く、動揺は、ただおまえ丈のもの。

走ってゆけば、
近くに視えた。
しかしそれは、
狂った遠近法。
闇夜の所為か、
否、
ゆれる視界が、
あわい希望が、
狂わせるのだ。

嘔吐から嘔吐へと、吐瀉物にまみれて笑っている。そうしてやつと繋ぎとめている。おまえは世界を滅ぼせたが、飛ぶには臆病に過ぎ、吊るには軽過ぎた。汚れたコンクリートのうえが寢室。数えられる程度の「たくさんの」星々が瞬き、不意に消える。そのときおまえは束の間の解放に身を委ねて、知らぬ間に窒息して果てる。緩んだ酔いの余韻がかたどる夜に、墓石など碎けばいい、腐臭はまだ、おまえを繋ぎとめて離さない。風漠がそしてやつと、やつと、はじめに名前から消去する。つぎにはもう、さらわれる塵埃、何処でもない、何処かへと……………、

秋川久紫

さらばシベリア鉄道♪ (1980年)

哀しみを凍らせて闇を抜ける

殺戮の記憶すら砕きながら

愛しき女ひとの面影

薄れゆくに任せて

諍いの只中に枯葉を投げた

長い旅路 まどろみの停車時間

サモワール湯気の果て幻を視た

戦火を彩る華と

落ちた男ひとを認めて

不意に開く銀の幕

違えた夢 追って

銃後 夏のバラライカ

祈りを爪弾き 待っていたの

この鉄橋越えたら始末をつけよう
書き割りの氷原に別れを告げて
愛しき女ひとの笑顔を
薄明かりにかざして
爆心の只中に時を戻そう

水の都 キーロフの港が見える
酒のように透き通る心が欲しい
学舎まなみやの声に応え
諭す男ひとを認めて
不意に止まる銀の幕

違えた夢 追って
銃後 夏のバラライカ
祈りを爪弾き 待っていたの

違えた夢 追って
銃後 夏のバラライカ
祈りを爪弾き 待っていたの

〔原詞…松本 隆〕
〔作曲…大瀧詠一〕

ミ・アモーレ♪ (1985年)

妖しい光を束ねる宵の市
疲れた心宥めゆく
舞姫の装い

白い石畳蹴って
高く跳び上がり
黒い髪で弧を描き
うなじ光らせて
参道を朱に染める

傀儡が闇夜で人形操るの
あたかも世界の裏側
見透かしてのように
せつなげな眼で

衣 重ねる間に 夢を
夢を取り違えていたから
扇 広げたなら負けね
鉛色の空を 仰いで
背中 晒す度に 恋は
恋は拙くなる アモーレ

神事を経巡り炎に焼かれるの
揺らいだ心諫めゆく
巫女たちの鈴音

浄き白鳥を追って

湖上の演目

旋回するのがミッションと
捧げ物の役を 愛おしむだけ

細い脚を伸ばし 奔る
急な坂を登り 下って
細い腕を曲げて 躍る
千紫と万紅に 埋もれて

衣 擦る所作にも 夢が
夢が附託されているから
扇 打ち据えたら勝ちね
黄金色の空を 仰いで
背中 反らせるごと 恋は
恋は深まってく アモーレ

アモーレ (Meu amor e...)
アモーレ (Meu amor e...)
アモーレ

〔原詞…康 珍化〕
〔作曲…松岡直也〕

倉田良成

音楽

ちんもくのなかから

音をとりだす

ミ、ファ、ソ、シ、ド

くみあわせによつて

きれいな七色の環がそこにかかったり

まったき暗黒があらわれたりする

レ、ファ、ラ、レ

というのは

ちんもくにつけくわわったのか

ちんもくの完全さからさしひかれたものか

音じたいからはなにもきこえてこないんだ

ただ、それらはときおり

しんじられないような手つきで

くうちゅうに

耳だけがもくげきすることのできる聖堂を

うかばせることがある

よるのゆめのうちでもてんくうで
さんさんとひかりをはなちながら

ねこ

気がつくとねている

うちのちやとらねこ

気がつくと

まるまったり、のびたり

たいせいをかえるしゅんかんを

かぞくのだれも見ることがない

かとおもったら、おそろしくしゅんびんで

きんにくのかたまりとなつてへやじゅう

ぬいぐるみの熊をおいかけます

その変わり身のしゅんかんも、また

だれも見えない

ねこのふわふわのたましいは

この世と、べつのせかいとのあいだにかかつて

どんなかたちにもなる、雲みたいなふわふわの

にご毛のよう

ぼくらとおなじように
ねこのそんざいの半分は、見えないものでできている
そのしょうこに、ごらん
ねているねこをもちあげると
白のおなかから下ははるかなふかみに続いていて
かすんで
よく見えない

水栽培

それが花であれば
ヒヤシンスでもクロッカスでもよい
さいしよはガラスのうつわのなかに
くろくうずくまる影だけしかみえない
さいしよのすうじつは、じっさい
くらくてじめじめしたへやにそれは置かれる
それから日のさす窓辺にうつされて、さらにすうじつ
赤やむらさきのはなやかなひばなが
フラスコのほそいくちからあふれだすだろう
はんしやするひかりにおののきながら

いちれつに置かれてむすめたちはいう
おねがい

わたしをここからだして

わたしをとじこめるこのへやからにがして

わたしをたすけて、そして

ガラスのびんをわって

わたしをすくって

そう花たちはいつせいにさけぶのだ

「死んでもかまわないから」と

けんをきそうぼひょうのように

いちれつにならんで

涙滴形のフラスコのなかからくるしげにうったえて

歯みがき

朝の歯みがきは天気の日のおおぞら

まぶしい校庭にひかりがさしてくるようだ

口のなかでおおきな花がひらく匂いがする

チューブからしぼりだされた小指の先ほどの白さから

おどろくほど高いかおりのしんよう樹が立つんだ

つめたいみずの混乱を、いつきに吐きだした口たちは
キンコンと鳴るがっこうの門のほうにすいこまれていく
校庭にはひかる石灰であたらしいラインがひかれ
先生はちょうれいの合図におもいきりふえを吹く
そんなことをおもいだす歯みがきがすぎだった
それはまだ
音楽室や理科室や
体育館のなかがじごくでなかったころのこと

かくれおに

きたかぜがつむじをまくひろばで
かくれんぼうをしてあそんだ
土管やブロックや、バス停のこたち
かくれるところはいくらでもあった
かわりばんこに見つけられ
かわりばんこにおにになる
五さいのぼくは土管をつんだものかげに
七さいのぼくはブロックべいのあいだに
九さいのぼくはいえのうらのおおきなこかげに

それぞれかくれていて出てこない
ふと、きがつけば

いろんなもののかげはかたづけられていて
いまはもう

かくれるところなんてどこにもこされていらないんだ

三面鏡

とびらをひらくと

こおりのいろにかがやく

遠いろうかが見える

ろうかのおくに、またろうか

そこでぼくらはじかんじゃなく

花びらみたいにかさなつた

めにもえるむげんを知る

おかあさんのくちべいの

ほのかなにおいをかんじながら

木村和史

外れる

世間というものがあって、人びとが平穩でまあまあまっとうな人生を送っていて、会社勤めをしていたり、主婦をしていたり、たまに起こる大きな事件も、皮膚の傷が癒えるように、いつのまにか社会と人びとの記憶の底に静かに沈殿していく。日々の暮らしから生まれる言葉が、それぞれの人生とそれほどぶれることなく、ときには良質な潤滑油のように口にされ、未来を織りなしていく。

そういうものからちよつと外れている感じを抱えながら、これまで生きてきた。大学を中退したり、6棟並んでいる三階建ての宿舎で、仕事もしないで昼間からぶらぶらしている男はわたしひとり、というような外れ方だ。わたしのところに年に一度くらい、警官が訪ねて来ていた時期があった。そして、お仕事は？ とか、とくにどうということのない

質問を二つか三つする。国勢調査のようなものかと思っていたら、どうもわたしのところだけに来ているらしい、とあるとき気がついた。宿舎の世帯主はみんな公務員なのだから、毎年、警官がやってきて仕事のことを訊いて回るのはたしかにおかしい。学生時代にちよつとしたことをしでかしたか、しでかさなかつたかという程度の、些細で子供っぽい行為のせいで、ブラックリストに載せられてしまつたらしいわたしの戸別訪問だったようだ。もちろんそんなリストを見せられたことはないけれども、三十代の後半になつて免許をとり、一週間後に交通違反をして交番に連れていかれたときに、「まだ学生運動はやってるのかね？」と年配の警官にいきなり訊かれて、「いやあ、あのころは流行でしたからねえ」と答えながら、穏やかに微笑んでいる

警官の表情に、妙な親しみを覚えたことがあつた。

危険がないと判定されたのか、いつのまにか警官が宿舎を訪ねて来ることはなくなつたが、むしろ、ちゃんと運動をやってブラックリストの上位にあつた人ほど、わたしなどよりずっと体制の内部に入つて活躍しているような気がする。わたしの人生は、体制からも反体制からも落ちこぼれる運命にあるのかも知れない。

年を取つて同級生たちもみな停年を迎え、家でぶらぶらしていることじたいは、世間から外れているとは言えなくなつたが、今は家でぶらぶらしている暇などなくて、ひとりの家をつくるという猫の手も借りたい労働をしている。初めて人生に巡り会つたみたいに元氣潑刺として、休日などないに等しい無収入の労働に励んでいるのである。ところがそのことがまたどこか外れた生き方のようなのだ。「娘に、『木村さんは自給自足を目指して、草を食べたり、保存食を研究したりしてるん

だよ』って言ったら、『奥さんに働かせて、自分だけいい暮らしをしてるんだね』だつてよ」と、最近、年上の親しい友人に言われた。この年齢になつてもまだ、そんな皮肉を言われるところをみると、外れることとわたしの縁が切れることは生涯にわたつてなさそうだ。無収入なのが問題らしいとは昔から気づいていた。男は金を稼ぐ労働をして家族をきちんと養わないといけない。いくら働いても、お金にならなければ意味がないのだ。

そういうこともあつて、どこか外れている感覚からいまだに自由になれないのだけれども、わたしではなく、わたしの外の世界が外れている感じが、このところぐんと強まつてきている。あちこちがたがたに外れていて、逆に、このわたしがせつせと接着剤をくつつけて回らないといけないような憂鬱な焦りを感じるほどだ。おそらく緩みやがたつきは、そのことが見えにくかつただけで、ずっと前からあつたのだらう。そうでないと、こんなに簡単に、一氣にがたがくるわけがない。

社会というのはもともと、外れている人たちの集まりでしかなくて、少数の人が外れているように見えたり、ほぼ全員外れて平気な時代があったり、いろいろ変化するものらしい。そんなふうに思うようになった。或る意味、残念なことだが、わたしが外れていることなど全然、気にならなくなったのである。

わたしが家をつくっている温泉分譲地には20数軒の家があつて、定住している人がほぼ半分、週末だけ近隣の町からやってくる人、夏のあいだ本州から来て滞在する人など、不定期に利用している人たちが残り半分で、年に数日しか顔を見せない人もいる。一軒あたりの敷地は100坪以上、600坪から1000坪程度のところが多く、もっと広大な敷地に立派な家を建てて、別荘にしている人もいる。わたしのところは340坪と平均以下だが、それでも東京時代には想像もできなかった贅沢さだ。

ところが、どういうわけか、敷地の境界のことで関係をこじらせてしまったり、井戸水

のことで、それまで仲がよかつた隣人同士が口をきかなくなったり、うーん、と唸つてしまふようなことがたまに起こる。

定住者と半定住者、地元の人と本州の人、町内会に入っている人といない人が半分ずつで、どう生きても構わない自由な土地に思えるのだが、「あの人は変わり者だ」という言葉もときどき耳にする。20数軒みんな仲良しというわけにはいかないようだ。欠点も優しさもある、小粒でどうということのないごく普通の人たちが暮らしているだけなのに。

ところで、変わり者というからには、変わり者でない人がいても不思議ではない。しかし個人として、変わり者でない人という看板を背負つて生きることが可能だろうか。結構な重圧がかかるような気がする。それに、わたしは変わり者ではない人を生きています、と堂々と言えるような社会だったら、おそらくそれは、わたしは変わり者として生きていますと堂々と言える社会でもあるだろう。

あの人は変わり者だと口にしながら、さつ

と自分を、そう言われたい人びとの陰に紛れ込ませる。なぜ、どうしてそんなふうに変わっているのか相手に質問し、理解しようと試みない。このわたしだつてきちんと訊いてくれれば、なぜわたしがこんな道を選択しているか説明することができるとも知れないのに。

たかだか20数軒の中にわざわざ変わり者をつくろうとする気持をどうにかするのは難しそうだ。教育とか命令で色を塗り替えるのは可能かも知れないが、ひとつひとつの気持が変化するのは簡単ではない。なにかの拍子に目立ったら、いつでも自分も変わり者になる可能性がある。そう考えたらお互い、もう少し寛容になつてもよさそうなのだが。とりあえず、よく理解できない人たち、なんとなく目障りな人たちを変わり者と呼んで、できることなら目の前から消えてもらおうとする気がわれわれには根強くあるようだ。猫や小鳥たちを観察していると、喧嘩や排除のストレスが生活そのものになつていゝと思えるほ

どだから、人間もやはりあきらかに動物たちの仲間なのだろう。

変わり者でない人たちというのはいかにも怪しげだし、変わり者を排除しようとするまっとうさというのも、根拠が薄いもののような気がする。

変に決めつけてくる幻想は困りものだが、底の深いまっとうな幻想というのはいつの時代もあつた方がいい。まっとうな社会のまっとうな幻想だけじゃなく、壊れかけた社会でもまっとうな幻想は堂々と生き続けて欲しい。たとえ社会ががたになりかけていても、まっとうな幻想さえ生きていけば、わたしは安心してそこから外れることができる。まっとうな幻想の期待すら抱けなくなつたら、わたしが外れる気持の余裕などなくなるだろう。排除するなら変わり者の方ではなく、権力をまとつた、まっとうと思えない幻想の方にしたい。まっとうな幻想という、それに腰かけてほつとひと息つける切り株をどうしても見つける必要があるようだ。

秋川久紫

テネレの夜の煌めき

—武邑くしひ句集評—

二年前の夏、クラフト紙のカバーが付けられた簡素な製本による武邑くしひ第一句集『TENERE』を最初に見た時、私が瞬時に想起したのは、昭和の末期に銀座の青木画廊が発刊した『一角獣の変身』というタイトルの冊子のことである。その冊子は昭和三六年の開廊以来、それまで青木画廊で開かれて来た展覧会のために様々な文学者が寄せた散文や詩を集めたものであり、そのメインの筆者は瀧口修造と澁澤龍彦と吉岡実であった。その本文用紙には薄手のクラフト紙が用いられており、見た目の印象といい、手触りといい、武邑の句集の表紙と非常に似ていたことがその想起の大きな要因となっている。だが、似ていたのは用紙だけではない。私には『TENERE』

『TENERE』も『一角獣の変身』も、共に芸術と文学の間を繋ぐへ絶望と挑発に満ち 不敵な架け橋の集合体のように思えたのである。

武邑の俳句にはいくつかの特徴があるが、まず目に付くのは切れ字の一つとされる「かな」の多用である。この句集の場合、末尾が「かな」で終わる句は全部で四九句あり、これに直前の名詞が仮名であるため、漢字の「哉」としている四句を加えると、全部で五三句もあることになる。これは全三百句の一八%弱を占めるのだが、この割合が一般的に多いのか少ないのか、といったことは感覚的に良く分からない。ただ、私にはどうしても武邑がここで明確な意図を持って「かな」「哉」を多用しているように思えてならない

のだ。例を示そう。

▽ポチヨムキンの書割揺らす野分かな (V)

▽雪花石膏アラバスターの靄あに生れます天使かな (X)

▽火焰樹のそらに虚しき打電かな (XV)

▽ムーラン・ド・ラ・ギャレットの顔てふ顔

の屍斑かな (XVI)

▽フォーリー・ベルジェールの鏡のなかの口

説かな (XVII)

▽扁桃ア몬드の月にさし組むすすき哉 (XXIII)

▽口の端に罅割るる冬の遁辭かな (XXIV)

これらの「かな」「哉」はいずれも現実の光景を見、現実の風物に感銘を受けて、そこに伝統的な詠嘆や余情などを盛り込もうとして使われている訳ではない。何故なら「かな」の直前の名詞の大半は実在するものではなく、作者が幻視した抽象概念、もしくはその抽象概念と組み合わせられた非在の事物に過ぎないからだ。自らが幻視した抽象概念や非在の事物に敢えて詠嘆や余情を示すとはど

ういうことか？ それは、現実から離れた抽象概念や非在の事物こそが、詠嘆や余情に値するというアイロニカルな前提に立つて武邑が作句しているからだと思える。そのような試みは観念的・哲学的であり、極めて孤絶したスタイルとも言えるが、私はそこに作者の反骨精神、あるいは反時代性といったものを見る。

武邑の俳句の二つ目の特徴は、間接指示語としての季語を用いずに、しばしば春夏秋冬そのもの、もしくはそれらを含む熟語を用いて、言わば直接指示語によって季節を表していることである。

▽キャラバンは針の孔より往けり夏 (I)

▽冬めくやあんたは知らない戀てふものを (III)

▽感化院から驅けどほし冬の渚まで (III)

▽消しゴムが消し去つてゆく拉薩ラサの春 (IV)

▽縞瑪瑙のメランコリアや秋の水 (V)

▽あふぎ見る汝が窓燈り冬銀河 (VII)

▽遠ざかる背中目で追ふ夏の果て (XIX)

▽教室におまへのしるし残る春 (XXXIX)

こうした春夏秋冬の語を含む句は全部で六五句 (春Ⅱ二一、夏Ⅱ一八、秋Ⅱ一五、冬Ⅱ一一) あるのだが、これは全三百句の二二%弱を占め、先程見た「かな」「哉」より更に多い。武邑はこの手法により、俳句に定められた季語という決まり事を半ば嘲弄するかのように、本来は淡い色合い (間接指示語) が好まれる世界にいきなり原色 (直接指示語) を持ち込むのだ。これらの句は、通常の季語を用いた句と比較して、とりわけ陰影がくつきりとしており、非常に鮮烈な印象を残す。それゆえ、私はこの武邑の手法を俳句におけるフオーヴィズムと名付けたく思う。

最後に、武邑の俳句を最も特徴付けている点を挙げて筆を置こう。それは、片仮名もしくは漢字に直した外来語、片仮名表記の固有名詞、平仮名表記の外来語などを句の中にしばしば暴力的に織り込み、そこに異国情緒と俳句と他の芸術・文化ジャンルとの衝突によ

るスパークの如きものを現出させていることである。既に挙げた「ポチヨムキンの書割」《露土戦争の故事》、「ムーラン・ド・ラ・ギャレット」《ルノワールの絵画作品》、「フオーリー・ベルジュール (のバー)」《マネの絵画作品》などもそうだが、他にも例えば次のような句がある。

▽春窮の湯屋にイナガキタルホかな (XV)

▽ヴェーヌスベルクの流連めぐりに倦み梅雨曇り

(XVIII)

▽ディエゴ・ベラスケスが居る蘆の穂の檜襖

(XXXVI)

▽遠方ちかたで時計遅るるラウンド・ミッドナイト

(XXXVII)

▽さゝめごとが耳を聳するチュニジアの夜

(XXXVIII)

このようにして、小説家や画家の名前、映画のタイトルやジャズの楽曲名などが唐突に句に挿入されることによって、文学と芸術と

の間へ絶望と挑発に満ちた不敵な架け橋が掛けられるのだ。こうした句は九五句もあり、全体の三分の一近くを占める。

ところで、冒頭で紹介した『一角獣の変身』の中で、澁澤龍彦は次のように書いている。

「私が興味をいだくのは、おのれの城に閉じこもり、小さな壁の孔から、自分だけの光り輝やく現実を眺めている、徹底的に反時代的な画家だけである。」これは、金子國義展のため書かれた文章なのだが、武邑の俳句にもそのまま当てはまるのではないだろうか。仮に澁澤が現在も生きていたなら、反骨精神、反時代性に彩られた武邑の句を絶賛するよう
に思えてならない。

confidence

街が様変わりしている。新しくできた大通りを、信号のないところで突っ切る歩行者は、きつと昔を知る人なのだろう。(後藤)

平井さんが亡くなったことが非常に残念だ。新年会で初めてお会いして、これからいろいろ話したいなあ、と思っていたのに。世の中、けなげで温かい気持は、自分のものであれ他人のものであれ、大事に育てていきたい。(木村)

近ごろは詩と向き合い格闘する機会が多く、言葉の難しさと愉しさとの間隙で、もはや被虐趣味に近いような心持ちで日々を送っている。言葉というものに対する不信を常に抱えつつ、またおのれ自身にもそれ

が及ぶことを感じつつ、しかし畢竟それは愛憎に他ならないものであることを、わたしは知っている。だからこそ、その混沌を越えたところに、表現のその先を覗きたいと思う。そうやってひたすら書き続ける毎日である。なににせよ、着地するところは愉悅。そこまでフラフラと飛ぶ丈だ。(小林)

今日、ブラームスのピアノ協奏曲第1番を、初めて聴きました。これでは、後のひと(ドボルザーク等)が、影響を受ける訳ですね。先のひとに、このような曲を書かれては、後のひとはたまりません。さて、詩の世界では如何に?(野村)

一度Facebookに載せたものなので、見

てしまった方には重複して申し訳ありません。Facebookには、その後久しぶりに外に出て、転んだところももう1度歩いたという詩も載せました。Facebookでは、読んだ人がいいと思った投稿には「いいね!」というものがつくのですが、これにはあまりつかず、外を歩いた方にはいつになくたくさん「いいね!」がついたので、ちよつと不思議に思いました。自分としては、どちらも出来は似たようなものだと思いますので、なぜそんなに差がつくのだろうと思つたのです。ちよつと考えて答えがわかりました。骨を折つた方は、私が骨折してかわいそうだと思つてみなさん「いいね!」をつけなかつた、歩いた方は、少し回復したようだからよかつたねと思つて「いいね!」をつけた。ただそれだけのことだつたんですね。確かにFBではタイトルも付けないし(あまり詩でございという形で出したくないので)、ネットではこ

のくらの行分けの投稿は山ほどあるので、詩だと思われなかつたんですね。まあ、詩と思われなくてもしょうがない程度に詩じゃないのですけど。(長尾)

父が亡くなり月日が経つとあんなに介護を頑張らなくてもよかつたのにと思うことがあつた。わたしを苦しめたのは、父の認知症と無信仰無信心の絡み方だつたような気がする。だけど、父が最期の最期までもつともつと生きたいと頑張り抜いた姿もまたここに残っている。できたら数年間の介護生活のことはきれいさっぱり忘れてしまいたい。詩を読み返してみればぞつとする。よくこんなところにいたなあ。けどまた誰かの介護をするようなことがあれば同じことをしてしまふんだろうなとも思っている。(福島)

真新しい春でもなく、真つ盛りの夏とも

言えない、春と夏の間の凹んだ季節に、生き物たちは次のステップに進もうとしている。実家の庭のとある木にアゲハ蝶の幼虫がたくさん這っていることにある日気付き、それとなく観察していると、脱皮を繰り返してやがて蛹になった（けれども、蛹のうち無事に蝶に羽化したのは、半分にも満たなかった。多くは、寄生蜂に食い破られて空っぽな殻のまま風に吹かれている）。駅では、毎年恒例のツバメの巣作りが行われて、巣の縁から首を出した雛鳥が、客たちの視線を集めている。彼らにとつて、巣をつくるための余白はどこにでもあり、役所に申請を出すこともない。けれども、許可を得る必要もない代わりに、少々危険が溢れている。（浅野）

ハーパー・リーという女性について少し調べはじめた。この人は映画、邦題「アラバマ物語」の原作者。アメリカ南部をもつ

と考えてみたいという思いもあって、「アラバマ物語」の原作、*To Kill a Mockingbird* などを読み始めている。他にやることは一杯あるのにね。（水島）

蒲原有明論のつづきを載せたかったが、ある問題に直面し書ききれなかった。次号に掲載したい。有明に多大な影響を与えた森鷗外の巨大さが眼前に立ちほだかり、これは大変だ、ということになってしまった。このあたりは倉田さんからご助言をいただきたく、次回の「横浜詩の会」を楽しみにしています。レギュラーメンバーであった故平井弘之さんを偲びつつ。（中村）

先日、高村薫が毎日新聞の「特集ワイド・解釈改憲」で、今の安倍政権の動向や国内の状況につき、「本当にこんなバカなこと、やる気なんですかねえ」「今の日本って妄想だらけだと思っんです。妄想があら

ゆるところを覆っている」「日本社会に今一番必要なのはパブリック、つまり『公の心』です」と、嘆息を込めて語っているのを読み、強く共感した。だが、高村のようなマトモな人の意見は世に正当に受け入れられているとは言い難く、多くの者が利己主義に走り、誰もパブリックなことを考えようとしないう「悪しきコモンス」がこの国を覆っている。一千兆円に迫ろうとしている国債・地方債の債務残高を自分の問題として考えている者はほとんどおらず、多くの若者が主権を放棄することによって、間接的に安倍政権を支持している。このままでは、この国が滅んでしまうだろう。

(秋川)

友人が敗血症に罹った。四人に一人は死ぬんだよ、と笑いながら彼は退院してきた。アルバン・ベルクも死因は敗血症だった。

虫刺されが発端と言う。

als was ich bin は、アルバン・ベルク作曲の未完のオペラ『ルル』より、「あたしのありのまま以外の」。(和田)

二週間ほど、深刻な痙攣発作や無意識状態を含む緊急入院をした。一時ICUにも入った。小誌も、したがってひと月近く編集・発行が遅れた。原因は、宿痾とも言うべき、自身の脳に関わる疵によるものである。五月の初めには平井弘之さんが逝ってしまった。なんとなく、人生ということを考えている。(倉田)

第42号 / 2014年7月15日

編集発行人 / 倉田良成

〒230-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ201

Eメール / kateis11@k3.dion.ne.jp